

【 特別企画：公開基調講演 】

2016年10月22日、於：熊本大学 くすの木会館

熊本の戦争遺産を未来につたえる

高谷 和生

(くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク代表)

1 はじめに ～戦後70年を伝える熊本のメディア～

只今ご紹介いただきました「くまもと戦争遺跡文化遺産ネットワーク」の高谷と申します。

本日は日本コミュニケーション学会九州支部の第23回大会にお招きいただきありがとうございました。最初、基調講演をとのお話を伺った時に、私では場違いではないかなと躊躇したところもありました。その後、昨年が現地水俣での水俣病問題での学びを、そして来年は長崎での被爆問題でということ、そのまん中で位置したここ熊本で、これらの語りをどうつないでいくかということを考えて、との事でした。さらにテーマが「戦争と記憶の語り」ということをお聞きしましたので、今回のお話しをお受けいたしました。

私は日本考古学が専門で、発掘調査等で出土した物による歴史検証を行い、ここ15年前からは、この手法で近現代遺跡の調査・検証を続けています。その中で、「近現代の軍事や政治の遺跡」特に「戦争遺跡」を対象として、調査や地域の市民グループ活動の中から、取り組んでいることをご紹介し、「戦争の記憶」をどの様につたえるのかについて、少し切り口を変えて今日はお話ができればと思っています。

戦後70年の節目の年は、被爆地長崎も含めて、皆様方のお住まいの各地域はどこも同じだったと思うのですが、新聞報道等でも「戦争と平和」の問題に丁寧に取り組まれ、これからの10年先を見越した時、いくつかのヒントがありました。この後、戦後80年に向け、どの様なことが出来るのか、どの様な取り組みが必要なのか、そして記憶をどう継承していくのか、私達にとっても大きな課題であろうと思っています。

特に熊本では、4月に大きな地震が起きました。少しずつ復興に向かっていますが、ここ熊本大学五高記念館もだいぶ痛んでおり、休館の状態になっております。そういう中で、先ほどお話しいただきました赤木さん¹⁾がお住まいの大江地区は、熊本の郷土部隊、第六師団と申しますが、その部隊が常駐した地域でもあります。地域に残された戦争遺跡である「歩兵第十六聯隊食堂」跡も、被災しています。

今回の熊本地震では、「戦争の疑似体験」を熊本県民の約1割、大体18万人が経験したのでは

ないかと、私はいろんな所でお話をしております。地震が終わった後「疎開」という言葉や「避難所生活」「被災証明」など、まさに昭和20年の敗戦間もない頃の言葉がちまたにあふれ、一瞬71年前に戻ったのかなと錯覚することもありました。そういう中で「戦争の記憶を語り継ぐ」ことは、熊本が経験した今回の大きな地震に重ねる事で、見えてくる部分があるのではないかと考えております。

「戦争のない平和な社会をつづけたい」との思いは、まさに私たちが地震で体験した非日常の中で「水がない」、「生活する家がない」、そういう中で刻まれた小さな平和の姿であり、こういうものが一つの形として本日の基調講演を通して、皆様方のなかで感じていただければと思っております。

それでは時間も限られていますが、プレゼン等を用いながらお話を進めいきます。今、記憶を語り継ぐということは、今回私たちが経験した熊本地震に関しても同様で、本当に大事なことです。昨年の戦後70年の取り組み、これは次の10年を考える上で、どのように取り組んだのかを、私たちがしっかり検証し、しっかり見届けたいと思っております。その意味から取り組みを振り返ってみます。

合わせまして、県内各地で戦争遺跡をどう守っていくのか、そしてそれを今の時代の人達がどう考えて、地域作りや地域活動の中に活かしていくのかということについても、現状を確認してみます。県内の戦跡保存各団体が発行した各種リーフレットがありますので、お持ちでない方がおられましたら、受付の方にあります。リーフレット等をご覧いただきながら、お話しをお聞きください。前座の話が長くなりました。

2 戦後70年から、次の10年に向けて

はじめに戦後70年を伝える熊本のメディアの取り組みをまとめてみます。地元紙熊本日新聞社が3年企画で戦争証言の聞き取りと活字化に取り組みを行いました。会場入り口の右側に、その第一回目からのものと、第14回目の新聞掲載分を切り抜きファイリングしたものを置いてあります。体験を証言された127人の方々の「命の証言」がまとまっています。本日証言された赤木さんも、熊日紙面に紹介され、活字としてまとめられていますし、戦後70年企画のビブレス「証言の会」でお話もされました。多くの県民が戦争に翻弄された事実が活字として残されました。非常に丁寧に、熱心に取り組まれ、県民の証言という視点で3年間連載が続けられました。

日本コミュニケーション学会は、言葉の概念を厳密に考えられてこられる学会であると思っております。今日、高谷の話の中で戦争遺跡、戦争遺産であるとか、震災遺産であるとかの言葉が出てきますが、ちょっと曖昧なところもありますので、その都度丁寧に説明をしていきたいと思っております。

地元紙の特集記事の紹介です。これは県内に残された戦争遺跡だけではなくて、それに関わっている人、戦後復興の様子、それらのことをまとめ、将来に残していくべき「記憶の遺産」であるとして、熊日新聞社さんでは「戦争遺産」とし、県内17カ所を選び出し特集記事が組まれました。あわせて、子ども達の学習として紙面「KUMATOMOコーナー」で県内戦争遺跡の特集を、こういう分かり易いマップ形式で特集されました。また戦争遺産を将来に伝えることの大切さを県民に直接に知っていただくという視点で、熊日新聞社さんと熊本放送さんと本会が一緒

に「県内戦争遺産の旅」という企画を昨年度は行いました。ここから「戦争遺産」という一つのキーワードが生まれました。

熊本の戦後70年の取り組みの中で、語り部のみなさん方も多くの場所で証言し、お話をされています。残念ながら、熊本には戦争資料館として、公的なものはありません。それとお恥ずかしいのですが、県立博物館というのが実は熊本にはないのです。熊本市立博物館が、熊本全域をカバーし総合博物館としてあるのですが、残念ながらスペース等の関係もあり近現代資料の展示が非常に弱いという事です。このような戦時資料展示のお手伝いをしながら「戦争の遺物・戦争資料」をどう残すのかという課題が示され、これも昨年度の戦後70年のキーワードとして出てきました。

戦争の記憶をどう活字として残していくのか。これは戦跡保存の各団体での証言集、また今日証言された「新老人の会」でも吉岡さんの体験記『零の進軍』等が出版されていますし、空襲の体験集も同様です。スライド真ん中の本が、地元紙からの『伝えたい私の戦争 第4集』で127名の証言をまとめられたものです。同じような体験記は人吉市福祉課からも、大矢野町郷土史会でもまとめられています。この様に、地域で丁寧に戦後60年からとりまとめていかれたということになります。この辺りは私の講演レジメの中の「戦後70年間の歴史、次の10年に向けて」という項目です。

3 戦争遺跡とは ～近代化遺産の軍事・政治分野、熊本の戦争遺跡の特徴～

この写真は熊本学園大学北側の産業道路沿いになりますが、大きなレンガ積みの門があり、当時の歩兵第十三聯隊の正門になります(図1)。軍都熊本、明治期の鎮西鎮台の時期からの九州防衛の要となって15年戦争期は第六師団の配置がなされます。熊本城とその周辺部には明治以降、たくさんの部隊が配備され、現在はその面影も全くないのですが、その跡には記念碑だけが残されています。ただ今回の地震で熊本城は大変な被災状況となり、その記念碑等も被災をしています。熊本城の一角、JTの南側には第六代熊本市長高橋守男さんを顕彰した高橋公園があります。ここは旧第六師団長官舎の跡であり、最初の画像の中央部の玄関の門の部分だけが公園の中に残っておりました。それが今回の地震で崩れてしまい、建物本体は戦後に熊本市河原町延寿寺に戦後移転されていたのですが、この寺務所もこのように被災地しております。



図1 歩兵第十三聯隊正門

第六師団の核を成す歩兵第十三聯隊食堂が熊本学園大学で、このような形で（図2）第2体育館として利用されています。



図2 歩兵第十三聯隊食堂（左は外観、右は内観）現熊本学園大学第2体育館

今回の地震で、こういう壁の所に亀裂がきたり、割れたり、天井の亀裂についてもこのようにしておりますが、小さな小部屋等については現況では全く手つかずの状態ということです。全てを元通りになるにはまだまだ時間が更にかかるということになります。

二番目の特徴として、九州で三番目に多い陸海軍飛行場、9カ所があげられます。ここ熊本は特攻の中継基地の役割が大きくなります。特攻基地といいますと、すぐ陸軍は知覧、海軍は鹿屋ということになりますが、熊本各地の中継基地があつて初めて鹿児島の前線の特攻基地が生きてくるんです。知覧等に出撃する部隊はキャバの関係で限られております。特攻出撃する部隊は、後詰め部隊が熊本に、さらに次の部隊が福岡その先の山口にいて、特攻攻撃が構成されていくということになります。その中で今回の地震被災地、陸軍菊池飛行場の給水塔では、こちらの柱のところに亀裂が入り、モルタルが剥離しています。県内戦争遺跡の中で指定文化財となり、文化財保護法できちんと守られたものは、この菊池飛行場給水塔とあさぎり町掩体壕です。掩体壕というのは飛行機を空襲から逃れるための防空壕みたいなものですが、この二つということになります。給水塔については、外部の肉眼観察のみで本体・躯体のダメージは不明で、被災復旧の手立ては出ておりません。

地下にはたくさんの軍時代の壕が残されております。熊本の戦争遺跡の総数を、私どもの団体では723件としておりますけれども、その中で多くを占めるのが軍・地域の団体等が作った特殊地下壕です。中には非常に規模の大きなものあり、菊池の陸軍大刀洗航空廠菊池分廠もその一つです（図3）。



図3 陸軍大刀洗航空廠菊池分廠飛熊地下工場第2格納壕の崩落様子

このように入り口の所が崩れてしまって、これは未指定文化財ですので、予算化ができず、いまだ復旧ができないということになります。文化財の復旧・復興を、熊本県が予算化し取り組んでおりますので、その中でなんとか修復ができればいいのですが、未指定の場合どうしても個人負担も生じ、復旧さえできないのも現実です。

そして南区城南町の隈庄飛行場。この飛行場には三船敏郎さんといって、若い方はなかなかピンとこないと思うのですが、往年の俳優さんになります。黒沢映画の「椿三十郎」や「七人の侍」での名演技で世界的スターです。敗戦末期におられ、世界のミフネが俳優デビュー前、1945年6月24日部隊祭で演劇をされた時の写真が一枚残っております（図4）。



図4 三船敏郎さんの戦時演劇写真

ここの被災もきわだっており、三船さんが写真を撮られた建物の近くでエンジンオイルを入れていた油倉庫と呼ばれ建物ですが、このような状態で壁が崩れて、建物が傾いてしまいました。

内部は三つの部屋に分けられたがっちりした建物だったのですが、被災によってこのような状態で壁が崩れてしまいました。この様な状態ですが、できるだけ被災の状況も記録として残そう、手実測とあわせ「3Dデジタルデジタル測量」を行いました。3D測量は、現在熊本城復元のための基礎資料作成にも一部使われている手法で、非常に精度の高いものです。これは写真ではなくて小さな点が集まったデータ群ということになります。

三番目の特徴として、今日配布しましたリーフレットの中に荒尾二造（東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所）です。このような三つ折りのリーフが、入っております。こちらは世界遺産となりました三池炭坑の石炭を原料とした黄色火薬を作っていた工場で、熊本県内で唯一の軍直営工場となります（図5）。



図5 東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所変電所跡

ここ荒尾は県北で、震源地からは随分と離れていますので、被災等はありませんでした。この写真の施設は半地下式で、全長40m、3階構造、全高が16mの耐弾式変電所施設で、荒尾の戦後復興の象徴として市が国から買収し残されており、今はフェンスで仕切られていますが、鍵は市が保管しいつでも見学ができる状態です。

次は4つ目の特徴です。熊本で飛行機を作っていたということは、ご年配の方々のご記憶の通りです。三菱重工業名古屋航空機製作所・長崎造船所船舶部の方々が熊本の方に来られ、ここで陸軍の四式重爆撃機「飛龍」を製造しておりました。大きな工場の前で、陸上自衛隊の戦車などが並んでおりますが、創設記念の市民開放での一コマです（図6）。当時航空機を最終的に組み立てる「第二組立総工場」となります。

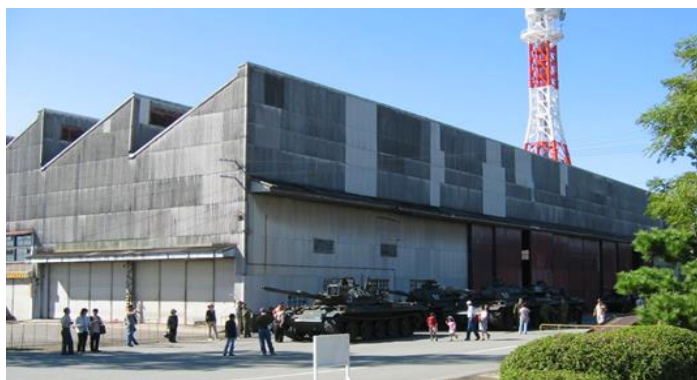


図6 三菱熊本航空機製作所第二組立総工場

地震でボルトがゆるんだり、柱が痛んだりということですが、こちらは陸上自衛隊の方で修復をされています。ただし、本製作所から派生した県下のいくつかの地下工場等については被災をした状態のままとなっております。

第5番目として熊本と沖縄との関係での本土決戦のための特攻艇基地等の項目です。県内各地の地域学習の中で、私はよくこの点についてお話しをします。県内中学生の子ども達は、修学旅行で沖縄方面に行く機会が多く設けられます。平和の礎で慰霊をされて、貴重な地上戦の証言を聞き、ガマ体験をして熊本に帰ってこられるのですが、帰って来ると「あのジンベイザメよかったね」とかいう話ばかりになってしまう。残念ながら沖縄平和学習が熊本の中で生きてこないことがあります。そういう中で、沖縄戦のことを考える上で大事なのが先ほど話をしました大浜飛行場の例での沖縄への特攻です。また、沖縄の子ども達が集団でたくさん熊本に来て生活をしておられる学童疎開です。熊本地震で味わった1次避難や疎開という言葉がよみがえります。時間稼ぎの沖縄戦が続く中で、熊本の天草地方には、本土決戦準備のためたくさんの砲台や特攻艇の基地が作られました。

県内各地に残る空襲戦災の「被害の歴史」、6つ目の項目になります。太平洋戦争末期にはB29による戦略爆撃があり、その戦略爆撃の最終到達が長崎や広島での原爆の投下ということになります。中小都市を目標とした戦略爆撃が熊本でも行われ（図7）、沖縄戦が終結した後には、米陸軍航空部隊による熊本を含めた九州各地への戦術爆撃も始まります。



図7 熊本の戦略爆撃・45年8月10日のナパーム弾攻撃

熊本では敗戦後まもなくの市民団体での空襲記録刊行はありましたが、現在は活動は休止し、以降はなかなかその研究が進んでおりません。8月10日に2回目の熊本大空襲があつているのですが、熊本市が出して戦災復興誌ではB29による空襲があつたと記されております。事実は沖縄からの陸軍爆撃機を中心した空襲なのです。この辺りはきちんと市が訂正をしていかなければいけないのですが、残念ながら行われておりません。また、7月1日熊本大空襲の中で何人の方がなくなつたのか、正確な人数、実は把握できておりません。そして誰が亡くなつたのか、どこで亡くなつたのか、どういう形でなくなつたのか、これも記録にありません。これは私たちもしっかりと市民グループとして調べていかないといかなとなんですが、なかなか進んでいないというのが現状です。証言を整理し、いろんな証言を語り継ぐ事が必要です。

また、熊本大空襲二回目の時、爆撃機から大きなドラム缶が上から落としてきた。工場の広場に落ちて広がって、工場の女性の従業員の方がひどいやけどをし、その傷がひどくてなかなか治らないという話を聞いたことがあります。何という工場で何を作っていたところで、そしてB29が何を落としたのか、こういうものが実はなかなか熊本市の記録の中にも出て来ない。実はこの日は8月10日で、そしてB29ではなく、沖縄から出撃をしたB24もしくはB25が大型ナパーム弾を熊本で初めて投下をした、場所は熊本の西区田崎町の現在田崎市場の旧工場の宿舎の広場だとわかりました。証言の中から丁寧に記録、そして調査をしながらその背景を浮かび上がらせて、それを私たちが語り継ぐという必要がそこにあるのではないかと思います。

第7項目として、朝鮮人・中国人・連合軍軍俘虜労働をここで示しております。記念碑は荒尾市正法寺に残されています。前座が長くなってしまいましたが、この後は大浜飛行場、このリーフレットを基に説明していきます。

4 大浜飛行場

陸軍公式記録では玉名飛行場というのですが、地元大浜地区で愛着を込め今も「大浜」と呼んでおられますのでリーフレットを作る時に「大浜」という名前をあえて使わせてもらいました。こちらの記録や調査を通して証言をどのように語り継ぐべきことなのかということの説明を参ります。

これは米軍が撮影をした大浜飛行場の写真です（図8）。米軍記載では、「K i k u s h i」菊池飛行場と書いてあるのですが、これは米軍B29を改造した写真偵察機F13が、長崎で原爆投下を行う前に、非常に丁寧に偵察飛行が何度も行われます。その記録については、長崎では多くの資料が残されておりますが、残念ながら熊本ではこういう資料等を公開する場所がないので、公開されておられません。そういう中で長崎空撮からの帰路、菊池飛行場を撮影する前に撮られた写真で、キャプションが誤記となってしまいました。大浜飛行場は菊池川下流域にある、小さな訓練飛行場ということになります。



図8 大浜飛行場の米軍撮影資料

現地に残されました町並みの中から、飛行場に関する建物基礎でありますとか、門でありますとか、そういうものを丹念に現地で確認をしてきました。それが何の遺構なのか、証言から建物等の姿をおこしたり、聞き取りを行います。またその中で先ほど、米軍資料として大浜飛行場の場合は空中写真が3カットありますので、その中で建物を復元し想定していきます。建物の復元を行う中で、建築ソフトのCAD技法を用いて、建物のデジタル計測を行います。大浜飛行場南側管理区画に、こういう大きな格納庫があったと記録が残っております。また教育隊正門も戦後の工事でこの部分が実は折れてしまっていたので、地元の有志の方々が街づくり、地域づくり活動でこれを修復復元されました。大浜飛行場には残念ながら門に飾ってあった看板の写真は残されておられませんので、知覧・隈庄・菊池飛行場の歴史資料を参考にしながら、文字の配列をこうだ、大きさはこういうものであったらと、復元し現地正門に飾っています。正門が修復されると、飛行場の様子もわかりやすくなって、訪れる方も非常に多くなりました。案内板や各建物の横の方には地権者の同意を得た上での、小型の案内解説看板がつけられております。こういう飛行場の全容を復元するという作業がここでは行なわれています。

その中で証言を聞き取る、そして特攻隊の記録を証言として残すことが大事です。これを私は「消極的な加害の立場」という言い方をしますが、基本は歴史事実をしっかりと「調べる、伝える」ということです。「加害」なのか「被害の視点」なのか、と確認していく必要が出てまいります。その中で大浜飛行場、陸軍特攻隊の中継基地であったということを伝えるための調査を進めて参りました。当時旧制中学生1年の高木範男さん、こちらの方（図9）が証言を寄せられ

てとして大浜飛行場で特攻隊の方々と会ったと、その方がどういうことで出撃されたのかという証言の裏付け作業を行いました。



図9 証言された玉名市高木範男さん

特攻で用いられた飛行機はこのような、陸軍の司令部偵察機を特攻機に改造したものになります。部隊名は「振武特別攻撃隊」、通称は「さくら特別攻撃隊」というと非常にステキな名前なのですが、先ほどありましたように尾翼の部隊マークが怖々しい、どくろマークをつけたものです。この中で陸軍が来たるべき本土決戦に向けて、性能が高く上空でのB29防空戦にも十分に利用できるような優秀な偵察機を、高速で飛ばし敵のレーダーをもかいくぐって、大型艦に特攻できる飛行機として温存してまいりました。全国で6部隊が編制されて、一部隊だけが沖縄の特攻部隊で使われました。その部隊がさくら特別隊です。

12名で編成をされておりますが、ご存命の方が下の方に、井手さん以下5名の方、特攻出撃されたのが竹中さんから慶益さんまで、そして事故死で残念ながら特攻に出ていない方もいます。特攻認定を受けていないので、その後ご遺族への遺族補償は随分違ったようです。その中の熱田軍曹が、玉名飛行場に逗留した方だと思います。時間があまりありませんので、部隊の特攻までの簡単な動きの紹介だけです。陸軍部隊ですが、なぜか海軍鹿屋基地からの出陣となります。4月7日5名が出撃。そして随時、二機をワンペアという形で特攻攻撃をして参ります。前日に4機が鹿屋基地にいたという記録が残っておりますので、竹中さん、東田さん、吉山さん、中川さんの4名だと思います。玉名飛行場に夕方一機だけおりてきて、凜々しい軍刀を持った姿は、こちらの熱田さん（図10）という、岡山県ご出身で少年飛行兵のご出身で20歳代で亡くなっておられます。やっと歴史の1頁を開くことができました。

その中でもう一つ、沖縄に向けての特攻というのが熊本での各飛行場のキーワードとなります。沖縄戦が1945年の4月1日、島嶼での前哨戦が3月31日から始まるのですけども、11月1日からの九州本土上陸作戦「オリンピック作戦」と申しておりますが、それに向けて、日本側も特攻機を九州に集中して配備をします。その中で多くの特攻機は、複葉の布張り中等練習機による特攻です。

会場入り口に四式基本練習機ペーパークラフトがございます。これは大浜飛行場では「赤とんぼ」と呼ばれる可愛い練習機です。これも特攻機仕様のものが配備され、実戦には使われること



図 10 振武さくら特別攻撃隊で大浜飛行場に逗留した熱田稔夫さん

なく鳥取飛行場で敗戦を迎えます。

ここでは大浜飛行場で敗戦を迎えた 90・91 振武隊に所属した池辺範男さんに焦点を当てていきます。韓半島新補基地で部隊編成を行った 12 機編成の部隊です。池辺範男さんは、写真上段中央で、この方になります。所沢基地で特攻用練習機を受領し、そして京都、菊池飛行場を経て玉名に駐機して参ります。逗留したお寺は玉名市天水の法光寺さんという所で、山門前でその当時写真を撮っておられます。このカットには池辺さんは残念ながら写っておられないのですが、地元の方との交流もありました。その後、部隊の方々は戦後復興に尽力しながら、部隊の集まり「法光寺会」を催されて、その都度記録の冊子を発刊されました。お聞きしたところでは、6 回だったと思うのですが、このお寺に集まってお互いの戦後を確認し合っておられます。お寺には自分達が出撃前に日の丸に寄せ書きをされたもので「撃沈」や「一撃必沈」と勇ましい出撃への決意の言葉がしたためてあります。ただこの部隊には一つ、口外できないような事柄がありました。これは部隊の方々の記憶の中にとどめるべきことで、決して外に出さないという無言の約束がありました。

池辺さんが私どもの活動においでになられて、墓参りをしたいといの事でした。そこで、いきさつをお聞きしました。大浜飛行場への部隊駐屯の折に、初めてこの飛行場に夕方に着陸をするときに、その当時、空襲で滑走路が使えませんので、別の臨時滑走路を着陸する際、1 機が見間違えて民家に落ちてしまいました。その時、民家にお母さんと赤ちゃんがいて、赤ちゃんが亡くなりました。木下一臣ちゃん、その方の自宅に伺い、焼香・慰霊をしたいとの事でした。部隊外には決して口外をしないということで墜落時に軍は周囲に強要し、もちろん地元の方々も一臣ちゃんの事故のことを記憶はしていたのですが、町慰霊碑の戦没者名に名前が刻まれてあったわけですが、その事実を伝えていませんでした。そうした中で池辺さんがその時の事情を話されました。2 年ほど後に亡くなられてしまわれたんですけども、ご自身が山口県萩市で陶芸家をされていたので、観音様の御面を供養に持ってこられて焼香がなされました（図 11）。

ちょうど 9 年前の出来事です。池辺さんにとっては「やっと肩の荷がおおりた」「部隊で生き残っているのは、自分ともう一人だけだ」「私達にとって“心の重し”だった」、そして「こんな戦争やっちゃいけない」とお話をしていただきました。この写真の左側は木下彰さん、戦後、お父さんが外地から復員されてきて生まれられた、亡くなった一臣ちゃんの弟さんになります。彰さんは「せめてもっとはやくお母さんが、母が生きていたときに焼香に来てほしかった」と言われ、



図 1 1 慰霊を伝える新聞記事

涙されました。掘り起こされた証言ではありますが、本当にそこに戦争の悲惨さ、人生を生きる上での当事者の苦しさが本当に表れていると思いました。

もう一つ、玉名飛行場に関わっての「タブー」がありました。この写真はこの事件に関わった米軍のP 4 7 戦闘爆撃機、戦後生産型です (図 1 2)。



図 1 2 P 4 7 戦闘爆撃機・戦後生産型

8月の10日の空襲は熊本市を中心として前月の7月空襲で攻撃から外れた地域を攻撃しました。その空襲に参加したP 4 7 と呼ばれる米陸軍の大型戦闘機ですが、爆撃もある程度は行う機体なので、戦闘爆撃機という言い方をしております。この機体が8月10日に熊本空襲の後、第2目標として大浜飛行場を攻撃しました。これに対して高瀬鉄橋を守る陸軍や海軍の部隊から高射砲や高射機関砲で、迎撃して米機は墜落してしまいます。搭乗機の方は、占領後の沖縄伊江島から出撃した第507戦闘機隊で、P 4 7 で編成された戦闘機部隊です。日本と同じように大学生を招集して予備士官兵として編成された部隊の「アールグラハム少尉」の機体でした。墜落し即死状態で亡くなりましたが、その後、これは日本全国いたるところで起きたことですが「町を引きずりまわし米兵を叩いたり」「口の中に物を押し込んだり」「蹴ったり」との行為がありました。まさに大浜飛行場では5月の空襲で13人の民間人が亡くなっておりますので、「米兵憎し」の思いがこの行為として出てきたのだろうと思います。飛行場の歴史の中で、空襲を受けた被害の歴史、そして戦争を進め「死体に対して陵辱行為を行った」加害の歴史、両面の姿があるということになります。さらにこの行為は戦後GHQの戦犯容疑取り調べの対象にもなっております。写

真資料はその時のGHQ資料ですが、決して資料の中ではこのような「隠された歴史」は語られないものとなります。

この様な歴史の掘り下げの取り組みを通して、「子ども達に語る」ということを一緒にやっていかなければなりませんので、地域のフィードワークや証言の会、そしてネットワーク通信等々で発表しながら進めています。そしてその証言や地域の語りの核になるものは、地域にお住まいの戦時を経験したすぐそこにいるおじいちゃんの体験記や証言だったりしたものを多くの皆様が丁寧に語っていくことによって、「こういう経験だった」「戦後はこの様な復興の様子があり、今の語られている姿があるんだ」ということがわかってきます。あわせてこれらの証言を大切にしながら、何かしかなの手立て、伝えるための手立てや工夫が必要となってきます。入り口の方にもあるのが、証言等を語り継ぐユングマンプロジェクトです（図13）。



図13 有明中学校でのユングマンプロジェクト

6年前の当初は毎回ラジコン機を運動場からとばしながら、飛行の様子を見てもらい、飛行訓練や戦争体験と重ねていました。その後は小さなペーパークラフトを作りながら、そこにメッセージを添え、言葉で表現するという活動のなかで、一人ひとりの心に刻むような活動を目指しております。この様な活動というのは、玉名の有明中学校では、文化祭で、子ども達自身で脚本から作成し、舞台衣装も準備し、当日発表し、一人ひとりが関わっていく中で体験をする事となります。表現する活動は、学校現場の中では長く言われている言葉ですけれども、受動的なものから、より能動的な活動へ進めて行くということで、一人ひとりの「心に刻む」ということができるのではないかと考えております。最後の方、まとめに入っていきます。

5 まとめ ～戦争遺産として語り継ぐ～

これまで被爆問題にあまり関わっていない私のような者が話すべきことでもないのですが、あえて広島原爆の話をさせていただきます。戦争遺跡の視点から見ますと、この原爆ドームは国指定の戦争遺跡、建造物としては広島県産業奨励館になります。原爆ドーム保存問題は、60年代になり起こり、それまで東北大震災の時にも起きた議論を思い出していただけると理解し易いと思います。このドームの中でたくさんの方が亡くなられたと、「全て片付けてしまい、一刻も見たくない」という議論が沢山されたと言います。一方では、「だからこそ残していかなければいけないのではないか」という議論もやはり出ました。実は今回の熊本地震でも同じ議論が起きていますが、やはり復興が第一ですので、震災前の生活を再建することがまず大優先になります。その

議論のなかで熊本ですと126年前の明治に起きた地震の記録が伝承されなかったというのです。なぜなのか。よくわかりませんが、記録は確かにあったのです。例えば細川家文書を保管する熊本大学永青文庫の中にも明治期に起きた震災記録というのが残っております。またその後の復旧の記録も、宮内庁の記録の中に、その修復した記録が発見されましたが、それは継承されていない。なぜなのかということは、熊本にいる私たちが解決しなければいけないことです。

先ほどの話に戻りますが原爆ドーム保存では60年代に根強かった、撤去し早く片付けろという意見から、人類にとって継承されるべきもの、平和の象徴という形として、これは地元高校生の平和活動が一つの始まりであったという事ですが、変容して参ります。そしてこの体験や証言が、人類史的に広島や長崎において、人類史的な意味合いとして記録が成される事となります。

そして1995年、広島原爆ドームが国指定文化財になります。これは国として国内法である文化財保護法において指定できませんと、世界遺産の登録ができません。それまでは太平洋戦争期の遺跡、遺物、物というのは法的には守られていなかったんですね。しかし、それを法的に守られるべき物、地域にとって大事な物は守っていいですよ、と改正がなされました。それで法改正が制御されて、広島原爆ドームが世界遺産になったということになります。現在、全国で240件程度の戦争遺跡の登録や指定等が少しずつではありますが、進められております。

戦後71年、現在広島では被爆体験伝承者プログラムが進められています。去年広島に行った時、関係の方とお話したかったのですが、残念ながらお会いが出来ませんでした。広島市HP等を拝見しますと、一人一人の記憶、伝承すべきものを、3年間という長いプログラムを組み合わせながら一つ一つ丁寧に伝えていくというプログラムです。非常に興味深い注目される伝承の伝え口ではないかと思えます。

熊本の話にいったん、戻らせていただきます。熊本県の宿痾として「ハンセン病」をかかえ、そして去年の本コミュニケーション学会が取り組まれた「水俣病」問題がありました。なぜ熊本でこの様な複雑な課題があるのかと言う方もおられるのです。ハンセン病問題は、私たちにとってまさに善意の加害者として元患者の方々を追い込んだ事実があります。加害の歴史を証言として残し、経験したものを伝えていかなければなりません。水俣の問題は、まさに地域の再生の課題であり、そして語り部の方々の活動は伝承すべき課題であると思えます。先ほど修学旅行の話をしていただきましたが、今回あえて熊本で戦争の記憶の継承という事は、昨年水俣、来年長崎につなぐという意味では非常に時節を得た良いテーマだったのではないかと考えています。

戦争の記憶の伝承に関しては、沖縄の地上戦、長崎原爆というこのように大きな戦争被害は熊本においてありませんし、他の九州各県においても同様のことだと思えます。けれども平和教育を進めていく中で、子ども達と学習し、記憶を伝えていこうとする活動をする中で、地域に残された戦争の傷跡に目を向ける、そしてその中で地域固有のテーマとして結びつける事が大事になります。沖縄修学旅行で貴重なガマ体験をし、平和の礎で慰霊を行っても、熊本に帰ってくればジンベイザメの記憶しかないというのではなく、沖縄の特攻に向けた、熊本の残された戦争の傷跡を見ながらその証言をしっかり聞き取る、そしてそれに関わった方々の生き方を学ぶ、そして戦後の語り部として、新老人の会の方も何名も今日お見えなっておりますけれども、そういう方々との戦後の姿を見ながら初めてその沖縄平和学習が生きるのではないかと思えます。また、長崎へは小学生の子ども達がよく修学旅行に行かれます。その前に行われるのが、地域に住む身近な被爆者証言の事前学習です。長崎さるくの見学コースの中で原爆遺構を、いろんな方と一緒に

にまさに「さるき」ながら、証言を基にして原爆を身近に感じ取る、そういうことで初めて地域に結びつくということではないかと思います。やはりそれを結びつけていかないと、戦争は沖縄や長崎だけの、まさに対岸の出来事ということになってしまうのではないかと思います。

戦争遺跡のことに話しを少し戻していきます。沖縄県の陸軍南風原病院壕が、日本で初めての戦争遺跡として指定史跡となりました。その後、全国で265件が指定や登録という形で保護が進んでいます。次世代に語り継ぐべき戦争体験や被爆体験を戦後71年、その後の10年に向けて、これをしっかりと語り継いでいくという取り組みが必要になろうと思います。戦争遺跡、戦績は歴史資料や証言等を重ねることによって、そこの中での記憶を想起させる。例えば今日の赤木さんのお話の中の空襲体験、大江での焼夷弾攻撃、爆撃、その傷跡は白川小学校の校舎の中に今も残っているんです。そういうものから空襲をイメージとして想起させることができます。しかしそれには「今を生きる」方々が、その記憶を伝える方が必要になります。当時の方々の非常に重たい体験の証言では、年数を経ていますので、そこの中は事実誤認であるとか、思い込みであるとか、そういうものが必ず起きるわけです。それをより正確なもの戦争の実相として、歴史学として掘り下げる作業が必要になってきます。この戦争が伝えるべき共通項、キーワードというのが出てくる、出していくという作業が私たちの活動であると考えています。

心に刻まれる体験的なプログラム、そして、いろんな集会等で色々考える伝え方の工夫、こういう風に言っていくと小さな物ですが、子ども達が手作業で作って行く中で記憶が入り込みますので、そういうものが大事ではないかと思います。共生社会をどのように作っていくのか、そういう中で、熊本の戦争遺跡が進化していくのだと思います。

最後となります。合志市黒石原地区に、旧逓信省、今でいうと総務省で郵便業務等を行う部局です。その当時郵便物を運ぶ時に航空機を使いますので、その民間パイロットの養成機関がありました。その学校は旧制中学校相当の教育課程でしたので、その当時の教育勅語や御真影を中心とした皇民化教育を主体的に学校の主要行事として行う施設が必要になります。それがこの奉安殿で、詳しくは『黒石原飛行場と奉安殿』のリーフレットに説明していますので、入口で取って下さい。ただ、ここで困ったことには所有者の地元自治会が、「神仏ではないとして邪魔だ、壊すと」いうことを決めてしまったのです。ただしすでにこの時点でこの奉安殿を、合志市文化財保護委員会で文化財相当と答申していただきましたので、残すべきだとして、市で買い取っていただきました。それでも、やはり邪魔なのでこの真ん中だけを抜き取り移せと言われて、それは困りますので地元自治会に再考をお願いしています。

この写真は、まさに赤木さんが経験された空襲の8月の熊本市の様子です。熊本地震の様子だと思われるかもしれませんがね。そういう中で、証言やこの様な写真等を集めるところ、展示する場所が熊本市にも県にもないのです。新老人の会の皆さん方は、丁寧に毎月例会をしながら語り継ぐ取り組みをされています。そういう証言が活字として残る、映像として残る、それを将来に伝えるための施設が熊本にはない。やはり作っていかねばならない。そうしていかなければ私は伝わらないと考えております。そういうことを最後にまとめていきたいと思います。

地震と記憶の伝承の課題です。今回の熊本地震は、日常の大切さを自覚するという機会になりました。我が家にも赤木さんと、同い年の義理の母がおります。4月に地震が起きて以降は、それまでは熊本市内に一人住まいでしたので、私の家の方にまさに疎開してきました。義理の母が言うには、自分は八幡製鉄所本館の事務員として勤めていたから、空襲が何度もあって、「逃げ回

って、これでもう終わりかな」との経験をしたと言います。それに比べると、今度の地震は周りの人達が助けてくれるから、という話になりました。熊本市や益城町他は大変な被害だけど、周りは玉名も含めて、あまり大きな被災を受けていない「被害の無かった周りが助けてくれる」と言うのです。あの激しかった八幡空襲を経験し、生き抜いてきた姿を見て、戦争を経験した世代は本当にたくましいなと感じました。この写真は先ほどの熊本城の東側、高橋公園の中の第六師団長官舎から見た熊本城の被災の状況です。地震の中、多くの戦争の体験者の方が今年の戦後70年とあわせながら、戦中戦後の風景や姿を重ねて今年の夏に多くの事をお話されました。県民の1割が熊本地震で被災し、避難所に逃げ、戦時をまさに疑似体験したのではないかと思います。その中で大切な日常というものが、平和な姿、より現実的な姿となって重なってきたのではないかと思います。

最後のまとめとなります。やはり県民の戦争の記憶を未来に継承していく施設、何らかの形で私たちが取り組まなければいけないことだと思いますし、負の遺産を巡る「ダークツーリズム的」な視点、これを施設内容の一つとしてもよいのではないかと思います。

熊本といえばくまモン。最初の地震の頃のくまモンは左側で、FOR KUMAMON と描かれたくまモンのイラストが中心でした。最近「頑張れ熊本県」ということで、くまモンが旗を振ってくれています。元気を出しながら熊本復興への道に進んでいきたいと思っています。最後にすてきなくまモンのカット絵で締めくくりとして、私の基調講演を終わらせていただきたいと思っています。

ご静聴いただき、ありがとうございました。

註

- 1) 新老人の会熊本支部員の赤木満智子氏。赤木氏は本講演前に「私の空襲体験」と題した戦争体験を語った。氏は戦争体験を記した「あの恐ろしい夜(1)」(『記録：熊本空襲 No.2』)、「あの恐ろしい夜(2)」(『記録：熊本空襲 No.4』)、「熊本大空襲」(『語り継ぐ戦争の記憶』)を発表している。
- 2) 本稿で使用した写真はくまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク高谷和生提供。